

## 「学び」と「ゆとり」

さとう  
佐藤

たかゆき  
貴之

●日本教職員組合 中央執行委員

ぼんやりと霧のように立ち込めていた疑問が、ふと晴れる瞬間がある。

山口県に行きたい。

小学生のころから、明治維新を生んだ長州という土地はどんなところだろうと思っている。いまだにその機会がない。

幕末の攘夷から倒幕へ向かった情熱はどこから生まれ、どう変化したか。その思いを抱いた志士たちはどんなところで育ったのか。一度見てみたいと思っている。

室町以来、広く中国地方を治めていた大内氏は周防の人である。海外貿易により富を集め、戦国期の義隆はキリスト教を保護した。

知識とは、そもそも断片的なことが多い。

幕末の長州の志士と、戦国期にキリスト教に傾倒した大内氏のイメージはつながらず、長門、周防という長州の器の上にこの二つがどうして載りうるのか、もやもやしていた。

本を読むのが好きだ。暇があれば書店にいる。

司馬遼太郎は「長州人の開明主義は幕末にわかに出てきたのではなく、すでに戦国中期にあっ

たといっいいい」(『街道をゆく』長州路)と書いていたが、私はそれに出会ったとき、目の前の霧が瞬く間に晴れて、爽快な気分になった。

「学び」とはそういうもので、その爽快さが、学びの醍醐味のような気がする。

私が高校教員になったころ、職場には様々な先輩がいた。それぞれの話から学ぶものが多かった。むろん仕事の話もあるが、それ以外の、教養だったり、趣味だったり、食べ物、酒、生活の知恵…含蓄ある話をしてくれる先輩が多かった。

この人は本を読んでいるなど感じさせる芳しい雰囲気がある先輩もいた。

溪流釣りの話をする先輩、茸や山菜取りの話をする先輩、日本酒は醸造アルコールが入っているのはどうのこうのと話す先輩がいた。

そういう意味で、たまにある飲み会は楽しかった。

最初に勤務した学校には、職員の「句会」が毎月あった。俳句の会だ。参加者は事前に俳句を作って幹事に提出する。幹事は名前を伏せて一枚にまとめ席上で配布する。一句一句それを批評しながら、一票を投ずる会だ。勤務が明けてから、町一番の料亭に席が用意され、俳句を肴にあだこ

うだと語り合う。職場の4割ほどが参加していた気がする。俳号（俳人としての名前）で呼び合い、お酒だけでなく、俳句にも酔うのだが、俳句に興味がない私はその雰囲気になじめず、数回で遠慮した。

句会のある学校は県内に数校あったそうだが、今はどこもなくなっただけらしい。

気がつくと、私も50代になり、いつしか先輩の年代になった。

そして、周囲にそんな様々な経験を持っている同僚、含蓄漂う話を聞かせてくれる同僚はいなくなった。

「進学校」と呼ばれる学校を主に回ってきた。同僚は、教科書のこと、問題を解く技術、学習時間の確保、スマホの害とか、偏差値を上げることとか、そんなことを生徒に繰り返し話している。

それらは、ことがらの「断片」であり、「末梢」である。それも、極めて狭隘な「断片」であると私は思う。狭隘とはさしあたりの成績を上げるためのものに過ぎないということだ。

飲み会も仕事の話ばかりになる。

教員は教科指導のプロであることはいうまでもない。その勉強はして欲しい。しかし、それだけでいいか。

ここが「学校」である限り、生徒に、「人生」や「社会」の意義、理想、理不尽…といったことを考えさせる種も蒔いていくべきだと思う。その種を生徒はどう感じるか、考えるか。また、その種はすぐに発芽しなくていい。いつかかなにかのきっかけで芽が出ることもあるだろう。

脳は神経細胞をシナプスという突起でつなげることで発達するらしい。さまざまな断片が、なにかをきっかけにシナプスでつながる。いろいろな経験や見聞が繋がってなにかになる。それは、

いつ、どこでつながるか分からない。直近かも知れないし、20年後かも知れない。しかし蓄積さえあれば、あったことを忘れていても、ふと気づいたり、思い出したりして、つながる。

「学び」とはそういうものだ。

同僚にやさしく目を向けると、今の学校は学業も進路も部活動も、数値目標を設定させられている。

国公立大合格者数（地方には国公立神話がある）や就職状況が注目され、部活動は上位入賞が求められる。その結果は校門の脇に看板として掲げられ、学校の宣伝となる。「学校の魅力化」ということばが普通にいわれるようになったが、その「魅力」で少子化の中学生を我が校に集めようというのだ。学校の規模はどんどん小さくなり、数年先に存続しているかというところがあまたあるなかで、それは涙ぐましくもある。

また、人口減少のなかで存続をかけているのは地域も同様で、「学校を核とした地域づくり」とまでいいだして、希望を学校につないでいる。

教員が、なにもかも抱えさせられている気がする。もうこれ以上は抱えられない。

これでは、教員は、家庭の時間も、趣味も持てない。本や新聞を読むゆとりなどなおさらである。目の前のことをこなすのに汲々としてしまうのは仕方ない。

真に涙ぐましいのは後者だと思う。

句会がなくなるのももつともである。

小学校5年生のとき、担任が、「テレビばかり見ていると日本人は一億総白痴化する」とか、「祇園の舞妓と先斗町の舞妓は違う」と話していたことを私は忘れられずにいた。だいぶ大人になって、テレビの話は大宅壮一（1900～70年 昭和を代表する評論家）のことばだと知った。舞妓の

話も京都を歩いて知る事となった。

「時代が違う」といってしまえばそれまでなので、私はそうはいいたくないが、昭和の先生は、小学生にそんな話ができた。今は、高校にもそんな話ができる「先生」はいないし、いたとしても、「適切・不適切」と頭をよぎり、花街の話など躊躇するだろう。

「先生」から受けることとはそんなものだと思う。「そんなもの」とは、その意味はずっと経ってからわかることが多いということ。小学5・6年生のときの担任から受けた影響は、今の私を作っていると感謝している。

学問を「教養」といいかえるなら、タモリは次のようにいっているらしい。

「教養なんていうのは、あるにこしたことはないんですよ。なんであるかっていうと、遊べるんですよ。あればあるほど、遊ぶ材料になるんです、教養っていうのは…」

そんなものを、生徒に投げられる教員でありたいと思う。

それには、ゆったりしたゆとりが必要と思う。私たちが学びから遊び、遊びから学ぶ。そのためにもゆとりが欲しい。

次号の特集は

「ヨーロッパにおける最近の労働事情（仮題）」の予定です。